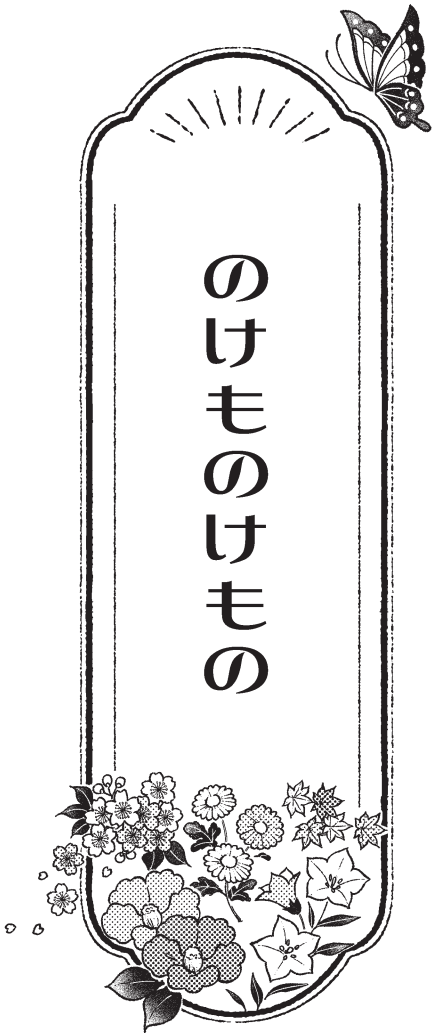

なかつ

一九一九年、東京會舘。

フォワグラとマッシュルームの冷製料理、羊のコートレット、ゼリー寄せのサラダ、ローストビーフ――手数のかかった西洋の料理ばかりが並べられている。

テーブルに並べられたそれらの豪勢な料理を視界に入れながら、小池義貞は「世間には目の前にあるこの料理の存在を知らないまま生きていく人間もいるのだろう」と考えた。いや、むしろそちらが大多数ではないか。

しかし、この会場ではこれらの料理に慣れた顔で洋装でうろつく方が多数派だ。会場の隅に用意されたピアノからは、西洋の作曲家が作った旋律が流れていた。

「新しい我々は西洋と同等ですから、同等のものを食べます」という自意識が料理の匂いとともに香っている気がする。小池はうんざりした表情を作って、それらの料理に冷ややかな視線を向けたが――ただちに、自分がそのような視線を向ける資格はないのだと思い直し、薄く自嘲した。

小池の自嘲を自分に向けられたものと勘違いしたのか、小池の斜め前でローストビーフの盛り付けられた皿を手にしていたモーニングコートの紳士が、にこりと精巧な笑みを浮かべて見せる。彼は確か、伯爵をもらっている華族であったはずだ。鉄鋼関連で財を成したのだったか。

辺りを見回す。この会場にいるのは、ほとんどが「華族」と呼ばれる階級の人間たちだった。今ここ、東京會舘の一室で行われているのは、ある華族が主催している食事会である。もちろん出入り自由というわけではなく、正式に招待を受けねば入室することはできない。小池家は華族ではなく、士族の一つであったが、個人的な取り計らいによりこの場に居ることを許されていた。

誰に言い訳するわけでもないが、別に好きでこの場にいるわけではない。生きていくため仕方なくここにいるのだ。しかし、自分がこのような社交場に出入りしているのは確かな事実である。端から見れば、自意識の香る料理を口に運ぶ華族たちと変わらないだろう。

けれども小池は、味噌や醤油のような所謂和食の味付けの方が好みであった。この場に馴染むため、世話になって

いる商人からきちんとした洋服を借りて着たが、家のような気を休める空間では和服を身に着けているし、どうも西洋の気取った空気は性に合わない——誰かに責められているわけではないのに、頭のなかに言い訳が並んでいく。自分は代々武士として生きてきた家の人間である、という自尊心が、拍車をかけているのかもしれない。小池は今年で二十七歳だ。生まれたときにはすでに明治の世となっており、「侍」は必要されていなかったが、父は幕末の動乱のなかで一時期、「侍」として生きていた。上野の山で明治政府と戦った話を、父は小池の幼少期に何度か聞かせてくれた。

ホールの端に置かれたピアノから流れる滑らかな旋律が空気を満たし、そこかしこで生じている話し声をなんとか喧しく聞こえないよう緩和している。毛の長い絨毯が敷き詰められた床は歩く度に少しだけ足が沈み込み、落ち着かない気持ちにさせる。

何をしていても気が沈むばかりだ。早くここから出たいのだが、小池をわざわざ招いた人物は他の人間と談笑しており、小池が入る隙がなかった。

仕方なく、何か時間を潰せるものを探して、小池はぐるりと視線を部屋のなかに巡らせた。

そして。

「あ」

ピアノの近くに、見知った姿を見つけた。

ゆっくりと、煌びやかな人間たちの合間を縫って小池は男の元へ近づいていった。

彼は端っこの背もたれが高い椅子に腰かけて、おしゃべりに興じる人間たちをぼんやりと眺めていた。ほかの者たちと同様にストレート・エンドの蝶ネクタイを首元で止めているものの、それは彼を紳士然と見せるよりも、子どもが無理矢理粧し込まれているような様子であった。背中は丸まったまま伸びることがなく、皿の上に乗せた羊のコートレットを少しずつ咀嚼する様は、どう見ても華族として数えられる人物の持つ雰囲気ではない。

小池があと数歩のところまで近づいても、男はこちらに気付く様子はなく、他の華族たちが違和感なく自信をまとっている姿を少しだけ羨ましそうに眺めていた。

「……お前、またこんな端で座って人間観察か」

「え？　……ああ、小池。来てたのか」

小池の声にぼんやりと反応した男は、声をかけてきたの

が知り合いであるとわかって安堵の表情を見せ、ほっと息をついた。
「こういう集まりは、いつまで経っても慣れないよ。それにほら、自分はこうして人間観察をしているのが好きなんだ」
そう言って男は再び、立食に勤しむ男女を眺める行為に戻った。まるでその光景をおかずにして、料理を食べているような、ある種の満足感すら感じる。
男――視ル目明月（みるめいげつ）は、これでも一応、華族である視ル目家の当主である。視ル目家の歴史は古く、家にある家系図を辿っていくと武士という概念が生まれる前まで行きつくと彼は言っていたが、詳細はよくわからない。特権階級に甘んじて怠惰に過ごし、「身代限り」――つまり自己破産となった華族が多い中で、視ル目家はなんとか商売で家計をやりくりできているようだった。このぼんやりとした男が商売を仕切れるのかと心配したが、実権は双子の妹が握っているらしい。実際に会ったことは数度しかないが、彼と比べてハキハキと話す、非常に爽やかな女性であった。彼は、といえば、ちょくちょくと田舎へ出かけて、珍しいものを見つけて持ち帰り、商売の種にしているという話だった。ある意味で一部の華族に見られる「世間知らず」を発揮しているとも言えるが、純粋無垢というよりただぼんやりしている様子の彼を、なんだかんだ小池は嫌っていなかった。視ル目の方も、華族でないけれど今日の集まりにやってきている小池に皮肉を飛ばすこともなく、友人の一人として接していた。
「小池は何か用事があって来たの？」
「そりゃそうだろ。俺は華族じゃない。呼ばれなきゃ来られないよ」
「ああ、そうか」
あっさり認めるとそう言って視ル目はすまなそうに頭をかいた。この会場にいる他の男性たちは整髪料できっちりと髪を整えているが、彼は小池と同じように短く切りそろえただけの髪型をしており、家を背負うべき当主というよりは、当主に仕える書生のようであった。
「少しは考えて物を話せよ」と注意しようとしたところで――どこからともなく名前を呼ばれ、小池は口を閉じた。ようやく話が終わったのか、と気持ちを切り替える。
「ああ、居た。小池くん。探したよ」
声のした方向に顔を向けると、恰幅のいい男がゆさゆさ